

上郡町の偉人

大鳥圭介

第二十九回「鵬程万里」中川由香

圭介は技術面、社会面の様々な分野で先駆者の役割を果たしました。本邦の技術で他国を支援する政府開発援助ODAの分野も、その一つです。途上国のインフラを整備し国を豊かにすることで、製品市場が成熟し、日本企業の進出を助けます。世界の国々と日本を共に発展させます。一方明治日本は、他国からの支援無しに自前の資金で、欧米から教師を招き近代化を成し遂げました。日本はその経験を他国への支援に生かします。圭介はその殖産興業の成果をもつて他国の人材育成に寄与した、技術移転の草分け的な存在と言えます。

明治十五年に圭介は来日した朝鮮の指導者を自宅に招き、工業や農業について語り合いました。「私は趙秉嘉、洪英植、魚允中、又金宏集、金鋪元らと何回も面会しました。彼等は拙宅を尋ねられ、心底から語りあいました。今かの国の指導者の方々を導いて政治を改良するためには、政略を用いるのではなく、誠意

誠心を以って接することが必要です。工業や農業の技術を教え、彼らの心情の方向を変化させ心服していただくことが実に大切です。その分野で、私は他人に譲らないと自負しています」と圭介は米英滞在を共に過ごした吉田清成への書簡で述べます。この頃圭介は工部省事務方、技術方のトップでした。その後元老院議員になります。技術官僚として国を導く役割を終え、後続の者の育成を図り経験を他国に生かす時期への転換期でした。

圭介の書簡にある朝鮮の方々は、朝鮮開化派の官僚たちでした。彼らは日本の維新を調べる為、行政機関、銀行、工場、鉄道などを調査する視察団として派遣されていました。洪英植は後に近代郵便創を進め、金玉均と共に清国の宗属関係を断ち切り、国内の守旧派を排除し、国王を中心に国を立て直そうとした方です。また、魚允中、金宏集らは、近代化運動である洋務運動や文明開化を支持した人物です。当時

の朝鮮の政治は腐敗し、国民はインフラの不備と貧困に喘いでいました。圭介が工部省官僚の頃より朝鮮の主要人物と交流を重ね、日本のインフラ整備、鉄道や農業技術を紹介していたことは特筆すべきことです。

圭介は明治二十二年に清国駐在特命全権公使に、そして二十六年に朝鮮国駐劄公使として任地に就きます。圭介の書生だった船津辰二郎は「大鳥公使は明治初期工業界の先達であったが、この頃すでに大陸の鉱工業開発に遠大な計画を抱いておられた」と語ります。また、圭介が校長を勤めた工部大学の学生だった工学士の桑原政が天津に派遣される際に「これは多年の望みが達成されることだ」と圭介は大いに喜びました。大鳥公使の朝鮮内政改革案には、鉄道の設置、電信の開設、軍の近代化、士官の養成、高等教育機関の設立など、圭介が歩んできた分野も多くあります。これらは朝鮮の発展において必要不可欠な要素でした。

工部省を退いた後圭介は、明治十七年に満州朝鮮民族の変遷と歴代の遠隔について、明治十八年に中国東北諸国沿革について、さらに明治二十年にインド史についてなど、アジア諸国を綿密に調査し、学士会院で論考を発表しました。技術支援には相手国の社会への深い知見が必須です。経済、気象、民族性、歴史、政治などとの相互作用の中で、技術は国のものとして生きます。アジア各国の社会地理を研究したのも、日本の殖産興業経験を他国の国づくりを生かしたいという思いがあったからと考えられます。

戦後、日本は他国への支援を継続しています。一九九〇年代の日本の政府開発援助の支出は世界一でした。多くはインフラ整備において、他国への技術移転と人材育成を行いました。昨年のODA支出額は世界四位でしたが、その実績は大きく評価されています。現在のアジア各国の毎年の経済成長は、日本のインフラ整備支援に負う所が大きいです。ノーベル経済学賞受賞のアマルティア・センは「世界に日本という国があつてよかった」と述べます。その先駆けに圭介の存在がありました。